
来客

En

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

来客

【Nコード】

N8521Z

【作者名】

En

【あらすじ】

癒やしと

トラウマと

二度目のパーティー

「公平！大丈夫か！？おい！公平！？」

公平はXにさんざん弄ばれて机の上に投げ捨てられた。

呼吸はしているが口から出血しているため内臓が破裂しているかもしれない。

もし、そうなら放置したら命に関わる。

「早く病院に！」

木之本が言うが、同時にそれが不可能だと気づく。

彼らはXの机の上にいるのだ。

ここにいる全員は大なり小なり怪我をしている、飛び降りるのは自殺行為だ。

「桑野に飛んでもらえば……！」

「そうか！おい、クワガタ！」

桑野は返事をしない。

「まだ気絶してんのかよ！？」

神田は言いながら、桑野に近づいて、寝ている桑野の体を揺らす。

「おい……。しっかり……ムニャ……寝てんじゃねえよ！このクワガタ野郎お！」

「ファルコかぁ！喰らえ、クワツガーシュート！」

桑野はエネルギー弾を神田に向けて放つ。

神田は間一髪で避けた。

「……ムニャ……」

「こいつ……殺す気かよ！」

「桑野は使えませぬね。どうします？」

橘が言った。

神田がそれに答える。

「どうしようもないな……」

「くそ……Xがいれば……」

この怪我をさせた張本人であるXに頼らなくてはならないとは。
この場にいる全員が自分の無力を恨んだ。

外からノックの音がした。

「誰か来たのか？」

「誰が？」

「ノックの位置変じやありませんでした？」

言われてみれば、音はXのノックと同じ位の高さからした気がする。
再び、音がした。

今度は、ハッキリ分かった。

「誰？」

「Xのわけないし…」

「取りあえず入れましようよ！」

神田と木之本は橘の意見に同意した。

このノックの主以外、公平を救える可能性のある者はいないのだ。

「どうぞ！」

「お邪魔します…」

「「妹ちゃん！？」「」」

ノックの主はYだった。

「みんな…」

Yの目に涙が浮かぶ。

「妹ちゃん！感動の再開は後だ！」

「公平を病院に連れて行ってくれ！」

Yは公平を摘み上げる。

「これは、ターゲットの人…。…ウウツ…」

Yは本格的に泣き出した。

「ちよっと！何があつたかしらないけど後にしてくれ！このままだと、ソイツ死ぬぞ！」

「これ位なら…舐めていれば治る…」

「妹ちゃん！今そういうのいいから！」

「…そうじゃなくて…私やお姉さまの唾は…ちよっとした怪我なら治せる…彼は口を切ってるだけだから…すぐ…」

「おお！…てかあいつその程度だったのかよ！」

「…けど…私は目の前に怪我人がいても、やらせてもらったことがないから…自信が無い…」

神田たちは、彼女が愛されてないのを思い出した。

ファルコという組織はそんな露骨な苛めをするのか。

「俺…初めてファルコが憎いと思った。妹ちゃん！自分を信じるんだ！」

「そうだ！君なら出来る！」

「公平の為に頑張ってくれ！」

そこから妹コールが始まる。

「みんな…。ありがとう…。私…頑張る…！」

そしてYは摘み上げた公平を舐めた。

「く…なんか公平が羨ましい！」

神田が呟いた。

ピチャピチャという音が遠く聞こえる。

「神田…」

「神田さん…」

「二人とも…いやこれは本気じゃなくて「お前もか…」…え？」

木之本が恥ずかしそうに笑う。

橘は親指を立てた。

「俺もです」

「お前ら…」

神田は、木之本はともかく、橘の事は殆ど知らなかった。
なのに考えている事は一緒だ。

「ふ…」

初めて―

「へへ…」

三人の心が―

「ふふ…」

一つになった瞬間だった。

一方のY。

彼女は誰かに必要とされる喜びを噛みしめていた。

（ありがとう…。みんな…）

Yは目を閉じて、一心不乱に公平を舐める。

（私…頑張るから…）「アレ…オレハ…イッタイ…」

（みんなが信じてくれたから…！）「Y！？イッタイナニガ…」

（私も…自分を信じる…！）「チョッ、ヤメテ。ダレカタスケ」

「妹ちゃん目的忘れてる…」

「どうします？」

「放置するのムカつくしな…助けてやるか。おーい！妹ちゃん

！」

「…」

「無視？」

「いや…、それだけ集中してるんだ」

「もうちょっと呼んでみるか」

Yはそれから三回ほど呼んでようやく気付いた。
その顔が三人に近づく。

「みんな…どうしたの…。私頑張ってるのに…」

また泣きそうな顔をする。

何だか可哀想だが、成功したのだしちゃんと伝えるべきだ。

「多分、ソイツもう治ってるから解放してやってよ」

「え…」

Yは手の中の公平を見た。

当然、怪我はもう治っている。

「私…また失敗しちゃった…」

「いや、どう見ても成功だろ」

「何で、俺、あんな事に」

「今、教えてやる」

言つと神田は左胸を抑え、苦しみだした。

「大丈夫…!？」

「妹ちゃん…君の力で俺を治してくれ…」

「神田あ!」

「裏切る気ですか!？」

状況が飲み込めない公平と、決意した表情のY

「分かったよ…。神田くん…」

「しまった!あんなに叫んだからあいつの名前が最初に覚えられた
!」

「俺、橘です!何か足が痛いから俺もよろしく!」

「橘くんは…次」

「ダメエ!」

「悔しけりゃ、自己紹介してどっか怪我したらいいでしょ!」

「そうか…クソ！俺、木之本…ってもう始めてる！」
「集中してるから呼ばない方がいいですよ」

「何これ？どういう事？何で神田が舐められてんの」
「心に重傷を負ったのさ…」

「頭にじゃなくて？」

公平と重なる声がある。

「「ん？」」

この声は…

「X？」

「君たち、何してんの…」

「…は！小夜子は！？」

「大丈夫だよ」

言いながら、小夜子を机の上に置く。

気絶はしてないが、震えている。

「なんか公平やけに元気だね。なんならもう一回やる？」

「勘弁して下さい！」

「ところで何でYがいるの？何で神田を舐めてるの」

Yは答えない。

「無視するの？蹴るよ？」

「待て待て！」

「集中！集中してるだけだから！」

「あれ、味見？」

「いや、怪我を治すとか、なんとか」

「何処も怪我してないけど…」

「本人が満足してるならいいだろ」

「終わり…。怪我…治った…？」

「また怪我してきます！」

「じゃあ、次お」そんなことより、何でウチにいるのか聞きたいんだけど」

「…ファルコの入社試験に落ちたので…組織を追い出されました…」

「入社試験!？」

「彼を殺すという…」

「そうじゃなくて、何で試験なんてしてるの!？僕は組織の最終兵器だよ？」

「…」

Yは無言で俯く。

公平たちは二人の巨人に聞こえないように話す。

「あの子、どんだけ駄目なの…」

「昨日から分かってたけど残念な子だよな」

「あんなに頑張ってるのにな…」

「また、俺を殺しに来たのかな…」

「違い…ます…」

Yの声だ。

上を見上げる。

彼女は泣いていた。

「…全部聞いてた？」

「…はい」

Yの涙が更に多くなった。

Xがため息をついた。

「僕らは五感も敏感だからね。この距離じゃ、どんなに小さく話しても聞こえちゃうよ」

「そんな…」

「妹ちゃんごめんな。悪気はなかったんだ」

「…けど私も…あなたを殺そうとしたし…」

「Y昨日も相当無理してたよね？」

「無理してたの!？」

「僕が助けに来たときも、わざわざ小夜子ちゃんを狙わなくても良

「かつたじゃん」

「あれは、俺が動けなくなるように…」

「いくらＹでも、本気なら公平なんか逃がさないよ」

「…妹ちゃん？」

「…はい」

「本当？」

「多分…本…当…です。…試した…ことが無いから…分かりませんけど…」

また、泣くのが強くなる。

「はは…。Ｚを呼ばなくても助かったかもな…」

「それで用事は何？」

「組織を追い出されて…」

「それはもう聞いたよ！」

「…ごめん…なさい…。言いづらくて…」

「また泣く！それじゃ分かんないじゃん！」

「…ごめんなさい」

「Ｚこえーな。なんかとばっちりが来そうだ。なあ？」

神田が問いかける。

が、誰も答えない。

「何だよ…みんな…」

「お前さ。さっきのＺの話忘れたのか？」

「さっきの…あ！」

Ｚが神田を摘み上げた。

「早く答えなさい！でないとこれを口の中に入れるよ！」

「駄目…可哀想…です…」

「じゃあ、早く！」

「その…い、いく所が無いので泊めて下さい！」

Yが笑顔になる。

「言えた…」

「妹ちゃん！頑張った！」

「エライ！」

「みんな…」

「本当に。よく言ったね。偉いよ。Y」

Xが笑顔でYの頭をなでる。

「お姉さま…！じゃあ！」

「けど駄目」

「え…」

「さあ、早く帰って」

XはYの手を引いて外に出した。

「待って私に帰るトコなんて…」ボタン

「…無いのに…」

「さて」

「鬼！」

「悪魔！」

「妹ちゃん風邪ひくぞ！」

「ちよつとみんな話を聞いて…」

「俺たちが帰るから妹ちゃんをいれろ！」

「いっそ、お前が出ていけ！」

「…」ズン

Xは無言で床を踏む。

「話を聞いて？」

「…」はい「…」

「少し昔話をするね。ただこれは聞いたただけだから、本当の所は分からない。取りあえず、みんなもう分かったと思うけど、Yは生まれつき残念な子だけど本当は優しいの。けど、それだと戦えないから、組織は彼女にわざと冷たくした。そうすれば少しは性格も変わるだろうって」

「だけど…」

「そう。性格変わるところか、厳しくされてるのは自分が駄目だからだ、って考えて誰かを責めたり、弱い者苛めに走らなかった」

「いい子だ」

「だから、組織では完全に使えない、兵器として失格、と評価をした。武器の支給も必要最低限のものにして、他に回すことになった。おかげで僕の武器が予定より強くなったんだよね」

「それで終わり？」

「まだ。それから組織は彼女の部屋に人間を入れて弄ぶように命令した。やっぱり性格を変える為にね。けどこれまた失敗。人間を弄ぶどころかそもそも触れず、最終的にその人の方からYに近づいて話しかけて友だちになろうとしたから中止。その人は改造人間にされて、今はサラリーマンとして生活してるみたい」

「何でそこまで知ってるんだ？」

「僕を開発した博士が別の支部でYも作って…。そういえば、あの人来る度に『同じように作ったのにどうして、あいつはあんなに駄目なんだ』とか言ってたな…」

「おい、話が見えないぞ。それと妹ちゃんを追いつ出したのどう関

係するんだよ」

「なんか、神田変だよ。そんなに苛められたいの？」

「確かに変だな。Ｙに関してなんかあったか？」

「別に。さあ、話を続けてくれ。」

「…後でお仕置きだから。それで、あの子も性格を変えるためと称して苛められて、三年前のクリスマスに酷い事件が起きた」

「三年前？ファルコが出来たのは最近じゃないのか？」

「最近まで表立った活動がなかっただけでファルコ自体は何年も前からあるよ。で、クリスマスの時に何かサンタにプレゼントを頼んでるらしくて、組織はそれを利用しようとした」

「サンタ！？」

「妹ちゃん、それまでサンタ信じてたのか…」

「可愛いですね」

「そして『クリスマスの朝、枕元にサンタからプレゼントが！』か」

「そう。そんで中に入ってたのが…その…」

「どうした？」

「いや、非常に言いづらくて…」

「妹ちゃんみたいな事言ってんな！ちゃんと受け止めてやる！」

「そう？じゃあ言うね。中には沢山の血と人の死体が入ってました」

「酷い！」

「悪魔だ…」

「ファルコって…本当は怖い奴だったんだな…」

「流石に僕でもトラウマになるよ…。それで、あの子それ以来クリスマス嫌いになって…」

「クリスマス嫌いって…」

「俺も嫌いですけどね」

「お前のはただのカップルへの僻みだろ。妹ちゃんとはレベルが違う」

「それで！何日か経ってるけど、あの子の為にドッキリでパーティーでもしようと思って！」

「おお！」

「その為に少しの間外に出したと…」

「そう！まだ夜は明けてない！君たちの人権は僕が握っている！さあ、Ｙを探して二、三時間暇を潰してこい！その間僕は料理を作る！」

「……イエッサー！」「……」

「あの子のことだからきつと、どこかに飛んで行ったりしてないと思うから！きつと近くにいます！」

「分かった！」

「そろそろ桑野起こして、連れていこう」

「小夜子ちゃんは…寝ながら震えてる。この部屋凄く暖かいのに」

「Xに何されたんだ？」

「公平は残るか？」

「そうするか…」

「ほら、桑野起きろ。正義の時間が来たぞ」

「正義！？」

「ああ、そうすれば良かったのか」

「じゃあ、行きますか」

「おう！」

「Ｙは頼んだぞ」

「任せろ！」

そして神田、木之本、橘は飛びだった。

悲しみにくれる少女の笑顔を取り戻す為に…

Ｙは体育座りで玄関前で眠っていた。

「ここまであつさり見つかるとは…」

「喰らえ！ファルコ！クワッガー！パンチ！！」

「あのクワガタ野郎！何てことを！」

「あれで起きますかね？」

桑野は左手に連続パンチを放つ。

「…ん」

Yは右手で桑野を叩き潰した。

桑野が落下する。

「あいつ、また負けてる」

「しかも寝ている相手に」

「それも女の子ですよね」

「何故この俺が…グフ…」

「…あれ？みんな…」

Yが目を覚ました。

「そつか…私…寝ちゃったんだ…」

「妹ちゃん、大丈夫？」

「お姉さまにも…捨てられちゃった…」

「…妹ちゃん？」

「私…どうしたら…」

「俺たちがいる！」

「え…？」

Yが神田たちを見下ろす。

「一緒にXに頼みにいこう！」

「きつと分かってくれるさ！」

「なんなら、あいつを追い出せばいいんだよ！」

「神田くん…橘くん…あと…えっと…」

「木之本だよ！よろしく！」

「…うん…！よろしく…！」

神田、木之本、橘、そして、Yの心が通じ合った。

それから、寒いから、ということ鬼ごっこが始まった。

本が小学校なので隠れる場所はいくらでもある。
Yはハンデで四つん這いになっている。
それでも、Yの方が捕まえるのも逃げるのも強い。
最終的に三人でYを追いかけることになった。

「三時間たつたな」

「結局捕まえられなかった」

「楽しかったよ…。みんな…」

「それは良かった。」

「じゃあそろそろ行きますか！」

「行く…？どこに…？」

「Xの家さ」

「また捨てられたら…どうしよう…」

Yは手のひらに桑野を乗せて、オロオロしていた

「その時は一緒に出て行ってやるよ」

「ハハッ。その方が幸せかもな。俺もそうしようか」

「じゃあ、俺も」

「…みんな…」

「じゃあ、入ろう」

Yが扉に手をかける。

また、出ていけと言われるのは嫌だ。

けど、友だちが出来た。

「恐いけど…恐くない…大丈夫…」
扉をゆつくりと開く。

部屋は綺麗な飾り付けがしてある。
クラッカーの音が鳴る。

「え…？」

「Y。メリークリスマス！」

終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8521z/>

来客

2011年12月26日22時56分発行